

自由執筆

愛国テロを賛美する国

新井 宏

韓国にいた頃は、いつもズボンの左ポケットが、分厚い財布で膨らんでいた。最高額の紙幣が八百円程度の一万ウォン札しか無かったからである。だから数万円分を持ち歩くと、実に豊かな気分であった。

それにしても、不便なことこの上ない。そのため、一般では小切手とか商品券で代用する便法もとられていたが、どうしても偽造や信用問題がつきまとう。だから当然、高額紙幣の発行やデノミがしばしば話題になっていた。

しかし、インフレ圧力になるとか、通貨の国外持出しが規制し難いとか、賄賂金の運搬が簡単になり汚職が増えるとか、韓国らしい理由で、なかなか進まなかった。試みに計算してみると、五億円ほどの一万ウォン紙幣の重さは一トン近くになり、トラックで運んだというのもあながち誇張ではない。

しかし、高額紙幣がないのは後進国の特徴である。

先進国の場合、シンガポールの一万ドル札(六十

万円)やスイスの千フラン(十万円)、EUの五百ユーロ札(七万円)を別格とすれば、スウェーデン、デンマーク、ノルウェイの千クローネ(一万七千円前後)、ロシアの五千ルーブル(二万五千円)、米国、カナダ、豪州、ニュージーランド等の百ドル札(一万円)、日本の一万円札、英国の五十ポンド(八千円)など、概して一万円程度である。

それに対して、中後進国の場合、インド、タイ、ベトナム、マレーシア、フィリピン、南ア、エジプト、イラン、イラク、アルゼンチンなどが約二千円、中国、インドネシア、パキスタンが約千円である。

誇り高き韓国としては、高額紙幣がなく「後進国のイメージ」で見られることには我慢できない。そのため、二〇〇七年になってやっと、十万ウォン札と五万ウォン札を二年後に発行すると決定した。十万ウォン札ならほぼ一万円で、先進国入りできる。

さて、その後の進展であるが、五万ウォン札の方は、予定通り儒学者栗谷李珥の母で詩人・画家として有名な申師任堂の肖像を用いて二〇〇九年に発行された。ちなみに息子の李珥の方は、もう四十年間も五千ウォン札の表を飾っているが、母上の方はその百倍の価値である。母と子の絆が

異常に強い韓国であるから、なるほどとも思う。一方、十万ウォン札の方は、肖像に予定していた独立運動家の金九が、最高額面の紙幣にふさわしくないと保守系から激しく反対され、結局取りやめになってしまった。

そもそも、金九の肖像を最高額紙幣に用いようとしたのは、盧武鉉大統領である。金九が、米国の背景に李承晩が進めた南朝鮮の単独選挙に反対し、南北統一政府を主張していたことを盧武鉉は高く評価していたからである。事実、もし金九らの主張が容れられていたなら、朝鮮半島における米国の影響は著しく削がれ、おそらく朝鮮半島には共産圏の統一国家が存在していたであろう。しかし、米国と強烈な反共主義者の李承晩がそれを認めるはずはなかった。結局、金九は政権を手にした李承晩によって暗殺されてしまう。

実は、金九のことを初めて知ったのは、韓国の郊外をやたら歩き回っていた頃である。道端にみすばらしい金九の碑が訳ありげに立っていた。読んでみると、著名な独立運動家で、中国に亡命政権を作り抗日活動を指導した人物らしい。

更に調べて見ると、第二次世界大戦の終結時に、思想犯、政治犯が釈放され、百にも達する政党が次々と現われるなかで、米国帰りの李承晩と中国

帰りの金九が統合して大韓独立促成国民会を結成、李承晩総裁のもとで副総裁に就いている。それにしても日本ではあまり知られている人物には思えなかった。

しかし南北統一を国民世論とする韓国では、右派からも左派からもかなり人気があったらしい。さもなければ、いくら盧武鉉が推したからと言って、最高額紙幣の表を飾る案が生まれるわけがない。当然、高潔な人物であったのだらうと思う。

ところが、これがどうも生来のテロリストとレッテルを貼りたくなるような人物なのである。

まずは、終戦の年の十二月、中国から帰国早々に、韓民党の党首・宋鎮禹暗殺の容疑で米軍に召喚されている。しかもその二年後にも同じ韓民党の党首・張徳秀を暗殺した疑いで召喚されている。いずれも確証が挙がったわけではないが疑われるのには背景があった。

実は、一九三二年(昭和七年)の李奉昌による昭和天皇暗殺を狙った桜田門事件も、同じ年の尹奉吉による上海天長節爆弾事件(白川義則陸軍大將が死亡、後に日米開戦回避に努めた駐米大使野村吉三郎海軍中將が右目失明、終戦時に降伏文書に調印した重光葵公使が右脚を失った事件)も金九の指示によるものであった。

更に遡れば、一九二一年(大正十年)にはソ連の政治資金が臨時政府に上納されていないという理由で、韓国人の共産主義者たちの暗殺を指示しているし、その翌年には刺客を放ち韓国の共産主義者金立を上海で殺害している。

しかしながら、ここまでは政治的な独立運動の一環と見なせないこともない。ところが、更に遡ると一八九六年(明治二十九年)には、ささいなことから憤慨し、閔妃殺害への報復と称して日本人商人の土田讓亮を殺害している。金九はこれを愛国的な行為に装うため、土田讓亮を陸軍中尉としているが、それが虚偽の主張であったことは韓国でも明らかにされている。それにもかかわらず、韓国ではこの事件をいまでも「鳴河浦義拳」などと持て囃している。

その金九は、因果はめぐるのであろうか、李承晩の指示で陸軍砲兵少尉の安斗熙により暗殺されてしまう。金九が今でも右派、左派を問わず人気があるのは、独立後間もなく暗殺されてしまったことも関係しているのであろう。

二〇〇二年にはソウルに「祖国と民族を愛し、それらを守るために一生をかけて闘った民族運動家」として、彼の号「白凡」を冠した「白凡記念館」という大きな歴史博物館が建設されている。

以上のことから判るように、金九は今の基準から言えば間違いなくテロリストであった。だから、韓国が金九の十萬ウォン札の発行を中止したのは本当に良かったと思っている。さもなければ、世界中から「韓国は政府もテロリスト崇拜する国」と嘲笑を受けるところであった。

ところが、ここに来て、朴槿恵大統領が中国を訪問し、習近平主席に、伊藤博文の暗殺者である安重根の銅像を犯行の地ハルビンに建てる許可を求める事件が起きた。中国側も驚いたことであろう。事前の外交交渉になかった件をいきなり首脳会談に持ち出すことも非常識であるが、テロリストの銅像を外国に建てようという国際感覚の欠如にも苦慮したのであろう。

いまや、「テロとの戦争」は国際政治の最重要課題である。米国もロシアもイスラム圏も、更には中国も、民族的、宗教的、地域的な独立運動を掲げる「愛国テロリスト」との戦いに悩まされ続けている。その中で、チベットやウイグルの少数民族独立問題を抱える中国が安重根の銅像建設を許すはずがない。その国際感覚の欠如が、韓国の歴史認識の欠如を如実に示しているのである。

世界各国の首脳に会っては、「独島や慰安婦問題」を言いつけてまわる盧武鉉や朴槿恵に、聞い

ているふりをしながら、辟易している首脳達の姿が目につぶ。

つい最近も、折から訪韓中の米国ヘーゲル国防長官を朴槿恵大統領が「接見」し、「歴史・領土問題にしばしば退行的な発言をする日本の指導部のせいで信頼関係が形成できない」と言いつけた。「接見」とは格下に対して用いる用語で、その相手に向って「言いつける」とは何事か。第一、「先生に言いつける」ことなど恥ずかしく女々しいことだと気付かぬのであろうか。もつとも朴槿恵は女性であるが。

それにしても、韓国は未だ最高額の紙幣が五万ウォン(四千元)で、ブラジルの百レアル(四千元)並みであり、台湾の二千圓(七千元)、メキシコの千ペソ(七千元)には遠く及ばない。不本意なのはなからうか。

もし今度、十万ウォン札発行の機会が来たならば、テロリストの金丸などでなく、「韓民族独立の父」安昌浩をぜひ採用すべきであろう。

安昌浩は、他の独立運動家らと異なり、テロによる武力行使等には一貫して反対し続け、「ウエノム(日本野郎)」という言葉を使わず、打倒の対象の相手にも敬意をもって「日本人」という言葉を用いていた。

彼の思想は「朝鮮人自身が近代国家としての力を養った上で、民族の実力を以って日本からの独立を勝ち取るべき」という点にあり、そのため日韓両国の歴史学者の評価は極めて高い。